

ホイットマンの「人格主義」

山 内 彰

1

ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) について調べると、誰もが詩集『草の葉』(Leaves of Grass) の出版 (1855年) を境にして、まるで二人のホイットマンがいるような印象を受けることだろう。『草の葉』出版以前のホイットマンは、おもに新聞記者をなりわいとしながら短篇小説や伝統的な詩法でいくつかの詩を書いていた。それが、1855年からは、大胆な自由詩人として登場してくるのである。この点について、ミラー (James E. Miller, Jr.) は「たしかに [ホイットマン初期の] 散文がたくさんあるが、『草の葉』とは直接の関係はないから脇へ置いておこう」⁽¹⁾ と述べ、1855年を境として断絶があるとの見解を示している。一方、レイノルズ (Michael S. Reynolds) は、『草の葉』第一版の「眠る人」(“The Sleepers”) が新聞記者時代に書かれたエッセー「夢」(“Dreams”) とおどろくほど似ていることを指摘して、「『眠る人』につかわれた劇的な手法は、ホイットマンが初期につかっていた新聞記事の文体から発展したものである」⁽²⁾ と結論づけ、連続的にとらえようとする。

このように1855年という年をめぐる、断絶説と連続説の二説があるわけだが、論者は後者の見解をとる。1855年を境に異質な二人のホイットマンがいるというより、変化はあるものの、基本的には変わらないのではないか、という学説である。このことを、「人格主義」(“Personalism”) と呼ばれる思想を中心にすえて、検討してゆくことにしたい。

2

1842年11月、ホイットマン畢生の当たり作であったと言われる「フランクリン・エバンズ」(“Franklin Evans: or The Inebriate; A Tale of the Times”)という名の禁酒小説が出版された。ホイットマンはその序文で、この小説のテーマは「物語の展開につれてあかされてゆくモラル」であると述べている^(a)。晩年になってこの小説をふりかえったホイットマンは、「この禁酒小説は酒を一杯ひっかけながら」⁽⁴⁾書いたと述べたそうであるが、たしかにわれわれの知るホイットマンといえば、それまでの伝統的な詩法を破り大胆な自由詩をつくり上げ、当時タブー視されていた性表現をふんだんにつかう詩人であり、おおよそ禁酒小説など書くようには思われないかもしれない。けれども初期のホイットマンを詳しくみても、節制を説いたのはこの小説一度に限ったことではないことが分かる。たとえば、1840年の『ロングアイランド・デモクラット紙』(*Long Island Democrat*)においては、酒以外に煙草も非難され、「紅茶やコーヒーを飲みすぎるのも、とがめられるべき不摂生の一例である」とも書いている^(a)。こうしたホイットマンの主張は、当時ごくふつうとされていたヴィクトリア朝モラルの単なるまねごとではない。というのも、すでにこの年にホイットマンは、やがて提唱することになる「人格主義」の基本概念である、人間性の改善ということにふれているからだ。おなじく『ロングアイランド・デモクラット紙』から引用してみよう——「ぼくはきっとすばらしく思索的な本を書くことになるだろう。そこで扱われるのは、人間の性格や個性、人間の性質の多様さ、人間の置かれている状況を改善する方法、そしてたたく国を治める方法だ。」⁽⁶⁾

だとすれば、今度は、なぜホイットマンが節制を人間生活に不可欠のものとみたのかという疑問が浮かんでくるだろう。彼の考えによれば、人間はそもそも生れつきすばらしい素質に恵まれているのだが、物質主義的な生活におどらされて、そうした芽が育たないのである——「人間一人一人の心の底にはた

くさんの甘い水を出す噴水があり、ちょっとさわってやるだけで噴き出してくるのだ。とは言っても、年がら年中、あわれな商用におわれて走り回る人間には....神がお与えになった喜ばしき麗しき能力のことを思う間もないのが実状である⁹⁾。」平たく言えば、「一人一人の魂に与えられているが、ほとんどの場合眠ったままでつかわれることのない才能」¹⁰⁾に堕してしまっているというのである。人間には、そもそもは、神によって与えられた能力があるのに、あまりに商業主義的な考えにとらわれるため、その能力も開花しないというわけである。ホイットマンがモラリズムの立場から、慣習を批判するのもこの意味なのである。酒や煙草といったものも、慣習が「こういったものに手を出させたり、実際また出させ」ているのである¹¹⁾。

この立場からすれば、慣習に束縛された大人より幼児の方が美しくみえるというのは当然のことである。1840年の『ロングアイランド・デモクラット紙』でホイットマンは、子供の死と大人の死を比較し、子供の死を称賛している。というのも「人生の初めの数年間」は、誰もが「健康で新鮮な性格」を持っているからだ。けれども老いるにしたがい、人生の暗く醜い面を経験せねばならないだろう。だから、もし大人の胸をあけてのぞけるとしたら、「そこに起きていることをみて、きっと気分が悪くなり仰天する」に違いない、とホイットマンは言っている¹²⁾。ここで思い出すのは、1840年代に書かれたホイットマンの小説にかならずといってよいほど顔を出す子供たちであり、彼らのほとんどが美しいものとして描かれている、ということである。たとえば「教室内の死」(“Death in the School-Room”, 1841)のティム・バーカ(Tim Barker)は「繊細で優しくな少年」で¹³⁾あり、「私の少年・少女」(“My Boys and Girls”, 1844)のルイザ(Louisa)は「人間という花の中で最も可憐で繊細」であり「天使みずから麗しの園へと連れてゆきかねない女の子」¹⁴⁾とされている。ここで忘れてはならないことは、この美しい無垢な子供たちという着想が、何も小説を書く段になって急に思いつかれたものではなく、それ以前からホイットマンの信念の一部となっていたということなのである。

人間は、文化や慣習の悪影響を受けなければ、誕生の時からすぐれた才能を

持つ神聖な存在なのである。そしてその才能は「生まれた時に人間に授けられたものであり、どんな憲章・立法・法令によっても正当なかたちで奪うことのできない自然法による特権」⁹³とされている。ホイットマンのモラリズムは、すでに新聞記者の時代から培われていたのだ。『デーリー・イーグル紙』(Daily Eagle, 1846)に、ホイットマンは「まだこれから世界に要請しなくてはいけない、高貴な改革が山ほどある」⁹⁴と書いているが、この「高貴な改革」という発想が後の「人格主義」へと発展したと考えるのが妥当であると思われる。次章では、彼のモラリズムについて、もう少し社会的・政治的な側面からみてみよう。

3

ホイットマンによれば、人間はそれ自身で神聖であり、何物にも犯しがたい権利を持っているのであった。とすれば、政府は、この内面の権利を犯すことのないよう、できればない方がよいということになる。1842年に彼は「最良の政府は最小の政府」という語句を引用しながら「この言葉の中には偉大で賢明なモラルが織り込まれている」と書いている。「政府は、いちばんましなものでも、必要悪にすぎない。小さければ小さいほどよい」⁹⁵とも言われている。人間には生まれながらに神聖な権利があるのだから、どのような政府もこれを犯すことはできないのだという信念は、さらに『オーロラ紙』において、こうも語られている——「いまや単に理論的にだけでなく（そんなことはとうのむかしから達成されていた）現実的にも、理性のある魂をもつ存在とは独立した個人であり、一人の人間は他の人間と同等であって、あらゆる主権は一人一人に内在し、それを政府に明け渡すことなど危ういことだ、とだれもが感じ始めている」⁹⁶ ホイットマンの説くモラリズムは、人間は内面的に神聖な権利をもっており、どのような政治的措置によってもこの権利は奪われることはないというものであったが、この「人間」の中にはもちろんすべての人間がふくまれるのである。「世界よ、こんにちは」(“Salut Au Monde!”)という詩では

「ここにいる一人一人は、ここにいる他のみんなとおなじくらい神聖なのだ」⁹⁴という箇所があるし、1847年に書かれたと推定されるノートには「僕は一人の人間だって例外をつくったりはしないつもりだ。売春婦や泥棒だって招きいれてやる。そういった連中と他の連中に何の差もつけたりはしない」⁹⁵という記述がみられる。その他、売春婦についても、「ごくふつうの売春婦へ」(“To a Common Prostitute”)の中でホイットマンはこう述べる——「落ち着いて、さあ氣を楽にして、僕がいるのだから。ウォルト・ホイットマンが。」⁹⁶

しかし、それでは犯罪行為や売春行為は、いっこうにおかまいなしということになるのだろうか。第一、どうして神聖なはずの人間がこうしたことをしてしまうのか。ホイットマンが、慣習や社会を批判する理由もここにあるのである。1857年の『デーリー・タイムズ紙』(*Daily Times*)には、売春婦について「こうした女の子の多くはきわめて美しく、優しそうにみえる。それに、もし周囲の状況が彼女たちに励みになるようなものであったなら、まわりから尊敬を勝ち得る幸せな女性となっていたことであろう。」⁹⁷と述べている。このような、社会的に悪いとされる人々は実は環境がわるかっただけなのだという発想は、彼が『オーロラ紙』を編集していた1842年にもさかのぼってみることができる。そこで、彼は「愛と幸せというふたつの種子はいたるところに蒔かれているのだが、大切に育まれないと永遠に闇の中に閉じこめられてしまうだろう」⁹⁸と書いている。あるいは同年に出版された『フランクリン・エバンズ』においても、「以下の物語は、ある若者の話であり、周囲の事情によって浪費という悪癖におちこんだ男の話である」⁹⁹と記されている。さて、今度は、そうした環境の方に注意を向けてみよう。ホイットマンは、独裁や抑圧ということばをとみに嫌う。それらは彼の称揚する民主主義の敵であるからだが、そうした独裁行為がアメリカにもはびこる可能性を、1842年に指摘している——「この国に玉座や称号をつけた貴族がいらないからといって、抑圧など起きるはずがないなどと考えないようにしよう。」¹⁰⁰ 1847年にも、ふたたび彼は「人民から宙に浮いた抽象的な権力で人民は支配を受けていればよいのだといった教義が、この時代に、この国の中においてすら、まだ支持を失ってはいないのである」¹⁰¹

と言っている。

ホイットマンにとっては、人間に内在する魂の神聖さこそ、すべての上をゆくものであって、これを抑圧しようとするどんな制度も人物も排斥されるべきなのである。もしそのような人物が権力を手に入れたら、人民は立ち上がってたたかうべきだと彼は考える。「合衆国に」(“To the States”)では、「アメリカよ、アメリカの各州よ、アメリカのあらゆる町よ、立ち上がれ、従順はよせ」⁸⁹と書かれている。つまり、「外側の権威は、つねに内なる権威のあとにくる」⁹⁰というのが、ホイットマンの理想なのであり、彼が考えているすぐれた人物とは英雄的に権力とたたかう人物なのである——「英雄は、自分に合わない慣習や先例や権威を突き抜けてそこから外へと、いともやすやすと歩いていけるものだ。」⁹¹ いってみれば、自分の内にある、神からあたえられた神聖さに基づいて行動する人物であり、それを破壊しようとするいかなる権力にも屈しない人ということになろう。政府というものはない方がいい存在なのであり、もし存在が許されるにしても、けっして個人の尊厳を犯すようなものであってはならないのである——「政府の、すべての政府の究極の目的とは、文化を花開かせ、男らしくすばらしい自立へのあの情熱を、すべての人の人格の中にひそんでいるプライドと自尊の念を、促し、育むことにあるのだ」⁹²。しかし、そのような目的をもった政府などあるのだろうか。この疑問に答えてホイットマンは、そうした政府はただ一つだけであり、それが民主主義に基づいた政府である、と言っている——「政府というものは積極的に善をなすことはできないが、悪をなすことはいくらでもできる。だから、ここにこそ、あの麗しき民主主義という原理が介入する余地があるのだ。民主主義ならば、こうした害悪のすべてを、未然に防げるであろう。」⁹³

それにしても、なぜ民主主義に基づく政府ならば、他の政府とはちがってうまくゆくというのだろうか。その根拠をみるためには、まずホイットマンの歴史観を知る必要がある。そこで、次章では、ホイットマンの歴史感覚について、検討してみたい。

4

ホイットマンにとって、歴史とは単なる過去の記述ではなく、一連のつながりを持った連続としてあらわれる。彼の詩「大斧の歌」(“Song of the Broad-Axe”)では、アッシリア、ローマ帝国、古代ギリシヤ、ゴート人、ヨーロッパの諸王と、つぎつぎに各時代の人物が登場し、最後にはアメリカにつらなって終わっているのがみられる。アレン (Gay Wilson Allen) は、このような人類の歴史を一連のつらなりとしてとらえる態度を「旅のモチーフ」と名付け、ホイットマンがその初期においてきわめて大きな野心を持っていたと指摘している。それは「全時代にわたる人間の進化を叙事詩風にあらわした作品を書こうとした」ことであり、じっさいにはついに果たせなかったが、「地球をよこぎる人類の行進」というタイトルの詩を企図していたとのことである⁸⁰⁾。ホイットマンにとっては「全宇宙は一つの究極の法則」⁸¹⁾なのであり、「すべてにまさる法則、法則の中の法則といえるのは、連続の法則である」⁸²⁾。歴史とは、彼にとって、一連のつながりをもった宇宙を支配している法則なのだ。そして、それは、終局的にはアメリカというゴールへと向かう運動であるとされるのだが、なぜアメリカがいわば人類の終着点としてイメージされるのか、今度はそれについてみよう。

アメリカは、歴史的にみれば、旧世界のあとに位置し、その意味では「遅れて来たもの」と呼べるだろう。ホイットマンは、1842年には『オーロラ紙』の中で「外国のものであればそれが何であれ、ほしがる嘆かわしい感情」⁸³⁾について述べているが、アメリカが旧世界のまねをしているということにホイットマンは耐えられなかったようだ。1845年には「アメリカは、子供っぽい従順さで、旧世界のあとをうんざりするくらい追いつけている」⁸⁴⁾と嘆息している。ホイットマンにとって、アメリカとは「社会的な自由がどのくらいもつものなのか、ためされる実験」なのであり、「自分を治めるという能力が人間にはどのていどあるのか、というテスト」⁸⁵⁾としての意味合いを帯びていたのだ。

アメリカがヨーロッパのまねをするのではなく、アメリカこそが「自由な人間が住む大陸という、栄えある光景」⁶⁸⁾を世界に示すべきであった。

ホイットマンの頭の中では、ヨーロッパやアジアといった旧世界は独裁者や貴族の世界であり、アメリカこそが自由な世界だとする新世界の神話によって把握されていたのである。イギリスについて、ホイットマンは「血を嚙って膨らんだ寄生虫と、上っ面ばかりの貴族たちに蝕まれた政府——その財宝は、民衆の血と汗を絞り取って得られたもの」⁶⁹⁾と述べ、アジア同様ヨーロッパも「反民主主義的な権威」⁷⁰⁾とされるのである。

もちろんホイットマンは、完全に旧世界を排除すべきものだとしただけ考えていたわけではない。そこには見習うべきものも多く、参考とすべきものも多かったであろう。しかし、アメリカこそがそうした「死にかけた旧世界の脳味噌の後継者」⁷¹⁾であり、すでに1845年に述べているように、アメリカの歴史とは「ひきずり倒し、つくり直す精神」⁷²⁾に満ちているのである。『草の葉』の序にも、「アメリカは過去を拒絶したりしない。他の社会形態や政治体制のもとでつくられたものも、カースト制や古い宗教にもとづく考えも拒まない」⁷³⁾とある。つまり、アメリカとは「過去の後継者であり、未来の人間のための管理人」⁷⁴⁾なのである。いわば、アメリカこそが旧世界の害悪を賢明にも避けながら、なおかつそこからすぐれた文化を継承し、未来へむかって連綿と続く歴史を担ってゆく存在だと言うのである。

ホイットマンの歴史観によると、アメリカとは過去からの遺産を未来のために継承し高めてゆくものであり、旧世界に蔓延る反民主的な政治を改め、民主的な世界をきりひらいてゆく、究極の理想であったのである。

5

ホイットマンが抱く理想のアメリカとは、ごくふつうの人間から成り立つ民主的な国である。『草の葉』1855年版の序文には、こう書かれている——「アメリカの優れた人物がいちばんよく分かるのは、行政府でも議会でもないし、

大使や作家や大学・教会・店舗でもないし、新聞や発明家においてですらない。それはかならず、ふつうの人々の中にみられる。⁴⁴⁾

この考えは何度も繰り返されている。1842年の『オーロラ紙』では「ごくはつきりしていることだが、上院議員や下院議員、それに州議員が他の人より偉かったり優れているわけではない。たいていのばあい、こうした人は、知的な水準からすれば、並み以下なのだ」⁴⁵⁾と記され、1856年のノートには「すべての詩人の中で僕だけがふつうの人々とおなじように苦しむ。僕だけが完璧に愛をともなって、彼らを受け入れ、また彼らから受け入れられるのだ」⁴⁶⁾と書き付けている。アメリカという国は、こうしたごくふつうの人が中心となるべき場所であるというのが、ホイットマンの主張なのである。しかし、なぜアメリカという国はごくふつうの人々を基盤として成り立たねばならないのだろうか。その答えは、1874年の『クリスマス・グラフィック紙』(Christmas Graphic)にみることができる。すでに前章でみたように、アメリカとは旧世界の文化を継承してゆく国であると同時に、旧世界の宿弊に落ち込まないようにせねばならなかったのであった。「将来のアメリカが首尾よく旧世界の力強い文化の蓄積に打ち勝つことができるかどうかは、まだわからない」けれども、間違いなくアメリカが旧世界に勝てる分野があるのである——「一つわれわれの文化が活躍できる領域が残っている。それも、いちばんすごい領域だ。つまり、平均的な大衆を自由なスケールでつくり上げることであり、とりわけすぐれた完璧な人格の持ち主を、束縛のない本物の男と女をつくり上げる」⁴⁷⁾という領域なのである。

だが、それではそのような「本物の男と女」に期待される素質とは、どのようなものなのだろうか。1847年のノートには「本物の高貴なひろがりあるアメリカの性格は、ヨーロッパやアジア型の社会や政治下では」つくり上げることができないものであるとされ、そうした性格とは「プライドがあり、自立心にとみ、自らを有している、寛容でやさしい」性格だと記されている⁴⁸⁾。3章のことばをつかうなら、どんな外的な権威にもたよることなく、抑圧には敢然と立ち向かう人間こそが、ホイットマンのいう普通の人々という理想像なのだ

ろう。人間は「何の保証も必要としない」し、「自分自身の魂にこそまず満たされている」⁶⁰存在であるべきなのだ。神によって与えられた神聖な権利をいかすことをめざす人物こそが理想であり、それはどんな人間にも可能なことなのである。旧世界と新世界を決然と色分けするものは、この人間の基本的平等の実現ということなのである。しかし、そうした人間の発現は環境によって大きく左右されるのであるから、最もそうした人間が育ちやすい土壌が必要とされるわけであり、それが民主主義なのである。だから、ホイットマンの「人格主義」とはふたつの方向をともなっているものであり、その両契機が成立するところにアメリカという国の意義があるのであろう。自らの魂を完全に信頼した個人という理想的人物像と、それを保護し育む環境としては民主主義というベクトルがそれである。しかし、はたしてこういった理想はほんとうに成立するのだろうか。いったい、このような理想的な人物などが存在するのだろうか。周囲を見渡してみても、すばらしい人徳をそなえた人間などいるのだろうか。ホイットマンも、このような疑念については、率直に認めている——「この浮かれ騒ぎと、信じられないような軽薄さ。それに向こう見ずなパーティーの乱痴気騒ぎ。不誠実、一流の指導者はなく、くわえて頑迷な大衆のあまりにも卑俗でみだらな姿……」⁶¹といったごく平凡な人たちのこのような姿は、教養ある人間には「絶えず度胆をぬかれ腹立たしいもの」⁶²にうつるはずである。だが——と、ホイットマンは続ける——見る人が見ればこうした人間の中にも「隠れた力や才能」⁶³がわかるはずである、と。ちょうど短篇「若者の魂の光と翳」(“The Shadow and Light of a Young Man’s Soul”)の主人公アーチャー・ディーン(Archi Dean)が、初めのうちは卑俗なだけだと思っていた人たちの中にすばらしさを認めてゆくという次の場面に似ているだろう——「だんだんと、そうした泥くさい田舎の人々の性格や習慣の中にもどこかすばらしいところがあると気づくようになった。ごく日常的なことがらにたいする誠実な感覚、客をもてなすときのその歓待ぶり、その仕事への勤勉な態度などに。」⁶⁴

アメリカはじょじょに物質主義的な発展をみせ始め、ホイットマンの想いとは裏腹に、彼の信頼するごくふつうの人々はいよいよ卑俗になり下ってゆく

のだが、それでも彼は大衆のすばらしさを信じていた。そして、こうしたジレンマの中から生じてきたのが、他ならぬ「人格主義」という概念なのである。これがはっきりとしたかたちをとるのが1868年のことである⁶⁴から、実に初期の新聞記者時代から考えると、30年近い歳月をかけて成立したことがわかるであろう。このあいだにホイットマンの思想は少しずつ姿をかえていったのであるが、それはけっして「断絶」といったものでとらえられるようなものではないだろう。新聞記者時代から提唱してきたモラリズムが、やがて成熟して「人格主義」へとまとまっていったのだと解する方が、より真実に近いように論者には思われるのである。

註

- (1) James E. Miller, Jr., *Walt Whitman*, Twayne's United States Authors Series (Boston: Twayne Publirhershers, 1962), p. 57.
- (2) Michael S. Reynolds, 'Whitman's Early Prose and "The Sleepers,"' *American Literature* 41. 3 (1969).
- (3) Walt Whitman, *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman*, ed. Emory Holloway. 2 vols. (New York: Doubleday, Page & Company, 1921) vol. I, p. 58. 以下, UPP と略記する。
- (4) Leon Bazalgette, *Walt Whitman: The Man and His Work* (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1970), p. 51.
- (5) UPP, I, p. 34. (6) UPP, I, p. 37. (7) UPP, I, p. 47.
- (8) UPP, I, p. 47. (9) UPP, I, p. 34. (10) UPP, I, p. 36.
- (11) Walt Whitman, *Prose Works 1892: Collect and Other Prose*, ed. Floyd Stovall. 2 vols. (New York University Press, 1964), vol 2, p. 55. 以下, PW と略記する。
- (12) PW, II, p. 248.
- (13) Walt Whitman, *Walt Whitman of the New York Aurora: Editor at Twenty-two*, ed. Joseph Jay Rubin and Charles H. Brown (Pennsylvania: Bald Eagle Press, 1950), p. 17. 以下, *Aurora* と略記する。
- (14) UPP, I, pp. 116-117. (15) *Aurora*, p. 90. (16) *Aurora*, p. 99.
- (17) Walt Whitman, *Leaves of Grass*, ed. Sculley Bradley and Harold W. Boldgett (New York: W. W. Norton & Company, 1973), p. 463. 以下, LG と略記する。
- (18) UPP, II, p. 75. (19) LG, p. 387. (20) UPP, II, p. 6.

- (21) *Aurora*, p. 130. (22) *UPP*, II, p. Z04. (23) *Aurora*, p. 98.
 (24) *UPP*, I, p. 167. (25) *LG*, p. 9. (26) *LG*, p. 190.
 (27) Walt Whitman, *Leaves of Grass: The First (1855) Edition*, with an Introduction by Malcom Cowley (Harmondsworth: Penguin Books, 1976), p. 13. 以下, 1855 *LG* と略記する。
 (28) *PW*, II, p. 379. (29) *UPP*, I, p. 167.
 (30) Gay Wilson Allen, *Walt Whitman as a Man, Poet, and Legend* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1961), pp. 62-63.
 (31) *PW*, II, p. 537. (32) *PW*, II, p. 381. (33) *Aurora*, p. 92.
 (34) *UPP*, I, p. 104.
 (35) Paul Zweig, *Walt Whitman: The Marking of the Poet* (New York: Basic Books, 1984), p. 29.
 (36) Barbara Marinacci, *O Wonderous Singer! An Introduction to Walt Whitman* (New York: Dodd, Mead & Company, 1970), pp. 66-67. 以下, *Singer* と略する。
 (37) *Singer*, pp. 64-65.
 (38) *LG*, p. 750. (39) *LG*, p. 457. (40) *UPP*, I, p. 92. (41) 1855 *LG*, p. 5.
 (42) *PW*, II, p. 513. (43) 1855 *LG*, pp. 5-6. (44) *Aurora*, p. 91.
 (45) *UPP*, II, p. 91. (46) *UPP*, II, p. 55. (47) *UPP*, II, p. 63.
 (48) *LG*, p. 447. (49) *PW*, II, p. 422. (50) *PW*, II, p. 377.
 (51) *UPP*, I, p. 232.
 (52) 「人格主義」という言葉はホイットマンの造語であるが、これが初めて用いられたのが1868年2月21日付けの手紙の中でのことである。この手紙については、次の文献を見られたい (Walt Whitman, *The Correspondence*, ed. Edwin Haviland Miller, 5 vols. [New York University Press, 1961], vol. 2, p. 19.)。